

# 「のだ」構文再考 ～Ontology (存在論)の概念を用いて～

英国ダラム大学言語学部 西住奏子

Kanako.Nishizumi@durham.ac.uk

## 0. はじめに

日本語学習者の中で習得が難しいとされる文法事項のひとつに、「のだ」がある。「のだ」構文は日本語学で長年にわたって研究され、日本語テキストや文法書でも、いつこの表現を使ったらいいか、使用場面ごとに説明されている。しかしそれにもかかわらず、「のだ」を適切に使いこなせる学習者は少ないように思われる。また、日本語教師も、学習者の使用が不自然だとは思っても、なぜおかしなのか的確に説明できないのではないだろうか。その理由はおそらく、「のだ」とは何なのか、という根本的な疑問が日本語テキストや文法書を読んでも、解決できないからだと思われる。本稿では、「Ontology (存在論)」という概念を用いて、特に「のだ」の「の」に注目しながら、「のだ」はどのような特徴をもつ表現なのか、その根本的な機能とは何なのか、再考察する。

## 1. 先行研究

### 1. 1. 「のだ」表現の機能

日本語学において「のだ」構文の研究は数多くなされている(佐治 1972, 1986(a)(b), 1991 他、久野 1973, 寺村 1984, Maynard 1992, 1996 他、田野村 1990、野田 1993 他 など)。それらの研究から、「のだ」は使用場面によって様々な機能・意味を持つ表現であるといえる。日本語テキストからの引用も含め、以下どのようなときに用いられるのか、主な場面を挙げていく。<sup>1</sup>

#### ①事情・理由を説明するとき

(1) 風邪をひきました。雨に降られて濡れたのです。(久野 1973)

#### ②事情の説明を求めるとき

(2) どうしてお酒を飲まないんですか。(『A Dictionary of Basic Japanese Grammar』)

#### ③見たり聞いたりしたことの情報を求めるとき

(3) おもしろいデザインの靴ですね。どこで買ったんですか。(『みんなの日本語』vol.2)

#### ④見たり聞いたりしたことから判断・推測したことが正しいかどうか確認するとき

(4) [元気がないようですが、]気分が悪いのですか。(久野 1973)

#### ⑤何かしら前提があるとき

(5) K: きょうは休みます。

N: 体調でも悪いんですか。(田野村 1990)

(6 a) 誰が行くのですか。

(6 b) 誰が行きますか。<sup>2</sup> (佐治 1972 (1991))

#### ⑥披瀝するとき

(7) 実は、私にも同じような経験があるんです。(田野村 1990)

#### ⑦驚きやいらだちを示すとき

(8) [若い青年と年配の女性の結婚を聞いて] 結婚するんですか。(『SFJ』vol.1)

<sup>1</sup> 他にも数多くの説があるが、ここでは繰り返し多くの学者の論文で挙げられているもの、また日本語テキストでよく「のだ」表現の説明に使われるもののみを提示する。

<sup>2</sup> 佐治は、(a)(b)の違いを次のように説明している。「(6 a) は「行く」ことがもうきまったこととして取り扱われており、疑問は「誰が」の部分に向けられているのに対して、(6 b) は「誰が行く」こと全体、つまり「行く」こと自体にも疑問が向けられていく点に違いがある。(佐治 1972 (1991))」

⑧命令するとき

(9) 静かにするんだ。(野田 1993)

⑨これから話したいことを切り出すとき

(10) K: 昨日、新宿へ行ったんです。

N: そう。(それでどうしたの)

K: そしたら、ぼったりダグラスさんに会ったんです。...

(『外国人が日本語教師によくする 100 の質問』)

「のだ」表現にはこのような機能・意味があると言われている。ではなぜ、「のだ」というひとつの表現が、使用場面によってこのように様々な機能・意味を持ち得るのであるのか。言い換えれば、「のだ」表現はなぜこんなにも多くの用法があるのだろうか。「のだ」表現の柔軟性はいくつかの論文ですでに指摘されていることだが、本稿では「のだ」の「の」に着目して、Ontology の概念を用いてその理由を再考察したい。

## 1. 2. 「のだ」の「の」の機能

「の」の再考察に移る前に、まずその先行研究を紹介したい。「のだ」の「の」に注目した主な研究に、佐治(1986b)、Maynard (1996)がある。「のだ」の「の」は述語の連体形に接続するため、「の」は文を名詞化する、つまり名詞節を作る機能があるとされている。一般に“nominalizer”と呼ばれる。

佐治(1986b)は、「のだ」の「の」について、次のように述べている。

「～のだ」の前は述語の連体形になっている。述語の連体形によって表される判断は、話し手(の主観)が責任を持ち、主張するものとしての判断ではなく、一応、話し手(の主観)の責任から切り離されたところで、いわば客体的に成り立つ判断である。... 「～のだ」の「の」は、その前の述語の連体形によって表される判断をいったん固定化し、「だ」はそれをもう一度主観的に断定するものである。

また、Maynard (1996)では、「の」だけではなく「こと」「もの」といった nominalizer 全般の機能を次のように説明している。

When clause is changed into a nominal, the event described is treated as a “thing” or a “fact”, rather than an event. ... In a nominal clause, the event is no longer described as an active event; rather it becomes a “state”.

このように、「のだ」の「の」には‘命題を話し手の責任、判断から切り離して、その内容(事象)を動的ではなく静的なものとして成り立たせる’機能があるといえる。またこのような事象の捉え方は、英語と比べて日本語により多くみられる特徴であるようだ(Maynard 1996)。

## 2. 「のだ」表現と Ontology (存在論)

### 2. 1. 「のだ」の「の」と Ontology

Ontology の概念を用いて「のだ」の「の」を説明してみよう。Horie (1998)は、格助詞・所有格、代名詞、Sentential nominalizer (以下 SN とする)としての「の」を、Ontology の概念を用いて文法化の観点から考察している<sup>3</sup>。Horie (1998)によると、Lyons (1977)は、Ontological entities は次の3つのレベルに分けられると提案している。

First-order entities : persons, animals, and things  
Second-order entities : events, processes, states-of-affairs  
Third-order entities : propositions

(based on Lyons 1977: 443)

<sup>3</sup>本稿では紙面の都合上、要点のみを説明するにとどめざるを得ない。詳しくは Horie (1998)を参照されたい。

そして、先に挙げたそれぞれの「の」の示す Ontological entities を以下のように分析している。

- ・ 格助詞・所有格の「の」 : First-order entities  
例) 先生の机、よしえの指輪
- ・ 代名詞の「の」 : First-order entities, typically things  
例) その本はぼくのです。
- ・ SN の「の」 : Second and third-order entities  
例) タクシーが歩行者をはねるのを見た。(事象)  
首相が逮捕されたのを知った。(命題)

結論は、格助詞・所有格→代名詞→SN と「の」が文法化されるにつれ、「の」が指し示す Ontological entities も first →second →third と変化したとしている。

この説をもとに言えることは、「のだ」構文の「の」に前接する名詞化された部分(名詞節の内容)は、SN と同じく、Third-order entities、つまり『「事象」「命題」の存在』を示すと考えられる、ということである。

## 2. 2. 新提案: 「のだ」表現の機能

「のだ」表現の機能に関する先行研究と Ontology を用いた「のだ」の「の」の考察を通しての筆者の考えは、次の通りである。1. 2. で挙げた「のだ」表現のもつ機能というのは、「のだ」表現自体がもつ機能あるいは意味ではなく、文脈、あるいは使用場面に合わせた解釈なのではないか、ということである。そこで、Ontology の概念を用いて、改めて「のだ」表現の機能を以下のように提案したい。

### < 「のだ」表現の機能 >

話し手が伝えたい情報(命題)を自分の主観から切り離し、客観的な事象として扱うことで、命題がすでに「存在」している、またはあたかも「存在」していたかのように聞き手に提示する。その「存在」「化」された情報(命題)と、それがあらわれる文脈・コンテキストとが組み合わせさり、様々な解釈を生み出す。<sup>4</sup>

この新提案を使って、まず同じ命題の平叙文・疑問文をそれぞれ説明してみよう。

- (11a) このケーキ、おいしいです。
- (11b) このケーキ、おいしいんです。

(11a)は、「このケーキ、おいしい」という命題が、そのまま話し手の主観を示す文である。たとえば、訪問先でケーキを差し出され、それを食べたときなどに適切な発話となる。一方、(11b)は、「のだ」表現を伴うことによって、話し手が「このケーキ、おいしい」という命題を、すでに存在している事象として示している。よって、たとえば聞き手にケーキを勧めるときは、「このケーキ、おいしい」という命題を既成事実として示す(11b)の方が、よりコンテキストに適切だと言える。そしてそのケーキを食べてほしい「①理由を説明する」発話、または「⑨これから話したいことを切り出す」発話とも解釈できるだろう。

- (12a) このケーキ、おいしいですか。
- (12b) このケーキ、おいしいんですか。

(12a)はこのケーキがおいしいかまづいかを聞く質問文である。たとえば、自分の作ったケーキを試食してもらった友人に聞くときにふさわしい発話である。一方(12b)は、「このケーキ、おいしい」とい

<sup>4</sup>本稿での『主観』を「命題に対する責任・判断が自分(本稿では話し手)に依存していること」、また『客観』を「自分に関わる事柄であるのに、第三者的な立場で見ること」と定義する。

う命題が存在するかどうか、言い換えれば、そのような既成事実があるかどうかを問う文である。この発話は、(12a)と違って「このケーキ(が)、おいしい」か確認するようなどきに使われる発話、つまり「④見たり聞いたりしたことから判断・推測したことが正しいかどうか確認する」発話と解釈できるのではないだろうか。たとえば、ケーキ屋でたくさんの人が試食しているのを見て、ある 1 人にそのケーキがおいしいか確認するようなどきに適切な発話だと言える。

### 2. 3. 分析

さらにいろいろな命題の平叙文・疑問文を分析し、新提案を裏付けたい。まず平叙文から見ていこう。

(13)

K: 結婚しよう。

N: ごめんなさい。実はもう a) ?結婚してる。  
b) 結婚してるの。

「のだ」表現を伴う(13b)のほうがコンテキストに適切だと思われる。それは、「結婚してる」という情報を、すでに存在している命題、つまり既成事実として聞き手に示すからである。たとえば、アンケートなどで未婚か既婚か聞かれた場合に、「結婚してる」という自らの状況を述べるのに(13a)はふさわしい発話だが、結婚できない訳を伝えるのに、結婚しているかどうかを知らせるだけでは適切な返事とは言えない。「(私は)結婚してる」という情報(命題)を既成事実として提示することによって、文脈・コンテキストと組み合わせさせて「⑥披瀝する」発話として解釈でき、「実は」とよく共起するのではないだろうか。また結婚できない「①理由を説明する」発話とも解釈できるだろう。

(14)

K: 離婚の理由は何ですか。

N: a) 疲れました。  
b) 疲れたんです。

この場合は、(14a)も(14b)もコンテキストに適切な発話だろう。しかし、次の点でややニュアンスが異なるのではないだろうか。(14a)は話し手の主観をそのまま示しており、結婚生活に疲れたという気持ちを吐露するような発話である。一方、(14b)は「疲れた」という情報(命題)を、すでに存在していた事象として提示しており、「疲れた」という既成事実が原因となって離婚に至った、という、離婚の「①理由を説明する」発話として解釈できるのではないだろうか。

次に、疑問文をみてみよう。

(15)

a) Kさん、もう帰りますか。  
b) Kさん、もう帰るんですか。

(15a)は、もう帰るかまだ帰らないかを知りたい場合、たとえば K と一緒に帰りたいときなどにふさわしい発話である。(15b)は、「もう帰る」という命題が存在するかどうか、そのような既成事実があるかどうかを聞く発話である。よって、たとえば午後 3 時頃、つまりいつもより早い時間に机の片づけをしている K さんを見て、K さんはもう帰るかどうか確認するとき、つまり「④見たことから判断・推測したことが正しいかどうか確認する」ときに適切な発話となる。

(16)

a) Kさん、何かいいことがありましたか。  
b) Kさん、何かいいことがあったんですか。

(16a)は、何かいいことがあったかなかったかを問う質問文である。たとえば昨夜パーティーへ行った K に聞くのに適切な発話だと言える。(16b)は、「のだ」表現を伴うことによって、「何かいいことがあった」という情報(命題)が、存在しているかどうかを聞く、つまり「何かいいことがあった」という既成事実があるかどうかを聞く発話となる。たとえば、ニコニコしている K に、「何かいいことがあった」か確認するときに適切な発話であろう。つまり、コンテキストと合わせて「④見た

ことから判断・推測したことが正しいかどうか確認する」発話であるという解釈を可能にするのではないだろうか。

このように、「のだ」の「の」には『話し手が、聞き手に伝えたい情報（命題）を、自分の主観から切り離し、客観的な事象として扱うことで、命題があたかも存在していたかのように聞き手に提示する』機能があり、その結果、「のだ」表現を伴う発話は、コンテキストと合わせて様々な意味に解釈できると考える。会話における発話の目的は、聞き手に単に情報のみを伝えることではない。発話には当然、話し手のその情報に対する態度や、その情報を聞き手にどのように伝えたいかという意図が含まれるはずである。「のだ」表現は、そのような話し手の態度や意図を発話に含ませるのに重要な役割を果たしていると言えよう。

### 3. 日本語教育における問題点

ここで、日本語教育における「のだ」表現を考えたい。実際のテキスト・文法書を見てみると、「のだ」表現がどのような場面で使われるか、という説明はなされているが、「の」の機能を説明しているものはないように思われる。言い換えれば、「のだ」とは一体何なのか、という根本的な説明が十分になされていないのである。教科書の説明、解説が間違っているのではない。教科書の説明が不十分であることが、学習者の不自然な「のだ」の使用に、少なからず影響しているのではないかと思われる。「の」の機能、「のだ」の特徴を理解すれば、なぜ当該の会話で「のだ」を使うと不自然なのか、またなぜ「のだ」を使わないと不自然なのか、を考えるときの助けになるのではないだろうか。

しかし、さらなる問題は、この機能をどう教科書で説明するか、ということであろう。それは、「情報（命題）を『存在』‘化’する」という抽象的な概念を紙面でわかりやすく説明するのは容易ではないだろうし、また、学習者のもつ文化的要素が、話し手の持つどのような情報を「存在‘化’」すべきなのか、それとも「そのまま伝える」べきなのか、を判断するのに影響し、日常会話においてズレが生じる可能性も考えられる。今後、さらに研究・解明していかなければならない点であろう。

### 4. おわりに

本稿では「のだ」構文を Ontology の概念を用いて分析し、「のだ」表現には「話し手が、聞き手に伝えたい情報（命題）を『存在』‘化’する」という根本的な機能があり、その上で、「のだ」が使われる文脈・コンテキストによって様々な解釈が可能であることを示した。本稿で提案されたこの「のだ」の特徴を、実際に日本語教育でどのように活用できるか、活用させるべきか、を今後の課題としたい。

### 参考文献

1. 久野暲 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店
2. 佐治圭三 (1972) 「「ことだ」と「のだ」——形式名詞と準体助詞—— (その二)」『日本語・日本文化』3 大阪外国語大学研究留学生別科 (『日本語の文法の研究』1991 所収)
3. -----(1986a) 「「～のだ」再説——山口佳也氏・金栄一氏に答えて——」『日語学習と研究』34 対外経済貿易大学 (『日本語の文法の研究』1991 所収)
4. -----(1986b) 「「～のだ」再説 (続) ——山口佳也氏・金栄一氏に答えて——」『日語学習と研究』35 対外経済貿易大学 (『日本語の文法の研究』1991 所収)
5. -----(1991) 『日本語の文法の研究』 ひつじ書房
6. 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』 和泉書院
7. 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお出版
8. 野田春美 (1993) 「「のだ」と終助詞「の」の境界をめぐる」『日本語学』第 12 卷第 10 号 pp. 43-50.
9. Horie, Kaoru. (1998) On the polyfunctionality of the Japanese particle *no*: From the perspectives of ontology and grammaticalization. In Toshio Ohori (ed.) *Studies in Japanese Grammaticalization – Cognitive and Discourse Perspectives –*. Tokyo: Kuroshio Publisher, pp.169-192.

10. Lyons, John. (1977) *Semantics* vol. 2. Cambridge: Cambridge University Press.
11. Maynard, K. Senko. (1992) Cognitive and pragmatic messages of a syntactic choice: The case of the Japanese commentary predicate *n(o) da*. *Text* 12 (4), pp. 563-613.
12. -----(1996) Contrastive rhetoric: A case of nominalization in Japanese and English discourse. *Language Sciences* vol. 18 No 3-4, pp. 933-946.

#### 日本語テキスト・文法書

1. 酒入郁子 他 (1991) 『外国人が日本語教師によくする 100 の質問』 バベル・プレス
2. 田中よね 他 (1998) 『みんなの日本語：初級 II 翻訳・文法解説英語版』 スリーエーネットワーク
3. 筑波ランゲージグループ (1991) 『Situational Functional Japanese: vol.1 Notes』 凡人社
4. Makino, Seiichi and Michio Tsutsui. (1986) *A Dictionary of Basic Japanese Grammar*. The Japan Times.